旭川医科大学　回顧資料(2)　昭和49年度

広報誌「かぐらおか」の誕生

本学は昭和48（1973）年９月に医学部医学科のみの単科大学として産声をあげた。開学当時、学舎はまだ完成していなかったため、当面の授業は旭川市北門町の北海道教育大学付属旭川小学校の旧校舎を仮学舎として展開された。翌49（1974）年５月にようやく講義実習棟が現在地に完成し、授業体制の整備が本格化し始めた。しかし、そのころ附属病院は，ようやく鉄骨が組み上がり始めたばかりの段階であった。

ちなみにこの昭和49年、日本経済は、前年に起こった第１次石油危機のあおりを受けて混迷を深め、ＧＮＰ（国民総生産）は戦後初のマイナス成長を記録した。「スタグフレーション」という耳慣れない経済用語も流行した。本学は、前途多難を予感させる経済状況の中での船出だったわけである。ちなみにアメリカでは、８月、いわゆる「ウォーターゲート事件」によって当時のニクソン大統領が辞任に追い込まれている。

この年の大衆文化的な話題としては、高校進学率が90％を超えたこと、書籍ではＲ．バックの『かもめのジョナサン』や五島勉の『ノストラダムスの大予言』がベストセラーになったこと、歌謡曲では森進一の“襟裳岬”や渡哲也の“くちなしの花”が大ヒットしたことなどがあげられる。また、池田理代子（漫画家）原作の“ベルサイユのばら”が宝塚歌劇団月組によって初演されたのもこの年で、この演目は、その後の２年間で観客動員数140万人を記録した。北海道関係では、国鉄（現在のＪＲ）「愛国」駅から「幸福」駅までの乗車券の売れ行きが半年間で300万枚を超え、人々の幸福願望を象徴する出来事として話題となった。

さて、本学ではこの年、現在地に移転して間もない９月１日付で、広報誌「かぐらおか」が創刊された。以降、この広報誌は年に４回（原則として５、９、12、３月）、ほぼコンスタントに刊行され、毎号、学生・教職員および学生の連帯保証人に配布されてきた。５月の号は新入生歓迎、３月の号は卒業生歓送に関連した文章にかなりのスペースが割かれ、また適宜、新任教官（講師以上）のいわゆる挨拶文も掲載されてきた。当初は原則としてＢ５判12頁だてであったが、平成５（1993）年発行の第78号（12月25日付）からはＡ４判となった。頁数も増加傾向にあり、近年では24頁に及ぶこともある。本誌は平成11（1999）年の９月30日付で、記念すべき100号の大台に達した。

タイトルの「かぐらおか」は、キャンパスの住居表示（数度の変更を経て現在では旭川市緑が丘東二条１丁目１番地１）が、当時は旭川市神楽町神楽岡３番地13であったことに由来する。この「神楽岡」という地名そのものの由来にかんしては、創刊号の編集後記にこうある。すなわち、「神楽岡はもともとアイヌ語で『ヘッチエウシ』といったところで『この丘は昔その上に祭場があり、お祭りの際は部落の人々がそこへ集って、シャーマンを中心にして原始的な舞踊劇を演じた場所』（知里著『ユーカラの人々とその生活』）でありました。明治以降、開拓移民が旭川に移住したとき、このアイヌ語の意味を日本語に置き代えて名付けたものと思われます」。そして、誌名を「あえて漢字にしなかったのもこのため」だと付記されている。

表紙をかざる題字は山田守英学長（当時）が揮毫したもので、これが現在まで一貫して用いられている。発行者は一貫して「旭川医科大学学生課」である。編集者については、創刊号と第２号は「旭川医科大学広報誌編集委員会」であったが、その後、同委員会は厚生補導委員会の設立とともにその下部組織となったので、第３号（昭和50年３月１日付）以降は「旭川医科大学厚生補導委員会」の編集となって今日に至っている。

本誌の表紙には毎号、学内外の建造物や風景など、鮮明で美しい写真が大きく掲載されている。創刊号は「完成した講義実習棟および体育館」、第２号（12月１日付）は「完成した中央研究棟」、第３号は「工事中の附属病院」であった。ちなみに、昭和58（1983）年５月１日付の第36号からは、表紙の写真がカラー印刷となった。現在では中記事の写真もカラーのことがある。

このように、体裁に若干の変更はあったが、編集ポリシーは創刊以来ほぼ一貫している。それは山田学長による創刊の辞「広報誌の創刊にあたって」（創刊号所収）に端的に表現されている。すなわち、「広報誌は、大学運営の過程で起った諸々の出来事、学生の厚生補導に関する凡ての問題、あるいは大学における教育や研究上の諸問題、更に大学の諸計画や方針などについて、正確な情報を提供して、大学人に周知せしめるとともに大学人相互の理解を深める絆ともなり、更に進んで大学運営についての反省と批判や将来に対する建設的な意見などを自由に述べることのできる『広場』でもあると理解する」。

本誌の内容にかんしては、昨今ではマンネリ化を指摘する声も少なくない。しかし、昭和49年度中に発行された創刊号から第３号（昭和50年３月１日付）までを一読すると、設立まもない本学を早く軌道に乗せたいとの気概に満ちあふれた、個性的な文章が多数掲載されていたことがわかる。とくに注目されるのは、草創期特有の「産みの苦しみ」を反映して、授業内容や教育方法をどうするか、その試行錯誤のさまを率直に綴った文章である。

中でも、開学以来ずっと生化学講座を率いてきた藤澤仁教授の「教育者とは何でしょうか」（第３号所収）と題する文章は、四半世紀余りを経た今日もなお新鮮さを失わない名エッセイである。文中にもあるように、開学当時、生化学の講座は１つだけであったが、昭和53（1978）年４月に２講座体制となり、それ以降、藤澤教授は生化学第一講座を率いて今日に至っている。ちなみに、現在では、本学草創期から教授の要職にあった教官は藤澤教授ただ一人で、同教授も、残念ながら来年３月には定年退官の日を迎える。

ここに、藤澤教授の了解も得て、前記の随想「教育者とは何でしょうか」を再掲する。大学教育のあり方、とりわけ広義の教養教育のあり方について、原点に立ち返って考えるきっかけともなれば幸いである。

なお、この記事の執筆にあたっては、前回同様、『旭川医科大学十年史』（開学10周年記念誌編集委員会編、昭和60年刊、非売品）と『近代日本総合年表　第３版』（岩波書店、平成３年刊）を参照した。

（旭川医科大学　歴史　近藤　均）

広報誌「かぐらおか」第３号（昭和50年３月１日付）より

教育者とは何でしょうか

藤　澤　　仁

医大で生化学の講義を始めて数ケ月になります。生化学の講座は残念ながら1つだけですから、私が生化学の教育に関して全責任を負わねばならないということになります。私の経歴から私が大学教育にあまり経験がないことを御心配下さる諸先輩方から、医学教育に関して涙もこぼれるような暖かい御忠告のお言葉を随分沢山いただいて参りました。お蔭様で私は、教育者としての重い責任を感じますとともに、自らの無能さを省みて空恐ろしくなり身も心もうち震えるばかりでした。本来なら一念発起し教育者の鬼と化して、ご教示いただいた責任とやらを果すべく努力すべきところでありますが、なにしろ無力な我身を想いますと責任の重大さに茫然となり自暴自棄となって、ついには教育者という言葉を耳にするだけで、吐気を催すようになって参りました。

我国の医学教育の水準は、欧米の先進国に比べると低く、従って医師のレベルも低いということを耳にすることがあります。我国の医学教育の年数が、米国に比べて少しばかり短かいのでそのためだろうとも云います。ですけれど例えば、医学の水準を測る尺度としてその国の平均寿命などを見てみますと、決して我国が欧米に比べて劣っているとは申せません。むしろ医学教育の年数が短かいにも拘らず、よくやっているという気持ちさえ致します。もっとも、我国には我国の制度があり、高い民度があり、風土があり、簡単に結論を下そうなどとは思いも致しませんが、我国の医師の水準が低いことを証明したいとお考えの方々も是非、まず統計的な data を示してからにしていただかないと納得のしようもありません。云うまでもなく私が申

しあげているのは、技術者としての一般のお医者様の水準についてであります。医師が単なる技術者かどうかというむづかしい問題はさておくと致しましても、医師としての技術がなければやはり医師とは云い難いですから、医学教育の目的には技術の習得ということが大きな比重を占めていることは確かでしょう。とは云っても医師の技術は日進月歩でありますから、如何に完璧な技術者を大学で養成したとしても、10年もたてば時代に遅れていくことになるでしょう。卒後教育の重要性が説かれるのも当然かと思われます。生化学の教育が技術者としての医師の養成にどれだけ寄与できるかということを考えますと、甚だ悲観的にならざるを得ません。生化学は医学の中では特に進歩の速い分野のようで、例えば医大で教科書に使っているHarper の Review of Physiological Chemistry は、1951年以来欠かさず２年に１度の改訂を受けています。恐らく10年前に大学を卒業されたお医者様方がお習いになった生化学は、現在私が学生さん達に話しているものとはまるで違ったものであった筈です。ですから私は、生化学を学生さん達と一緒に勉強しながら、この進歩の速さになんとしても食い付いていく根性を身につけてくれることを祈り、そして卒後にもその根性を少しでも残してくれることを期待しています。

古くから医は仁術と云われ、多くの人達は医師に必要なのは技術だけではなく、ヒューマニズムの精神がなければならないと云います。ヒューマニズムの精神は、１つの専門に閉じこもらない、全人間的教養であるとも云われます。しかし学問や技術の進歩が極度に専門化した現在、全ゆるものを包含した全人間的教養というものを果して期待できるでしょうか。私達教官は合理主義に基づいた西洋医学のそれぞれの専門分野の講義を担当しているのでありますから、西洋流の自然科学に基いた各々の専門分野の教養から生まれたヒューマニズムを語るべきではないでしょうか。生化学の分野では、遺伝子の分子生物学的な研究から遺伝子(ＤＮＡ)の２つの機能、即ち１つはＲＮＡ転写に続くタンパク質合成による個体の保存と、もう１つはＤＮＡ複製による種族の保存という機能が明らかになってきました。これらは食欲と性欲という人間の存在にとって根原的な２つの欲動となって現われるものでありましょう。このような欲動の尊重なくして、人間の存在もヒューマニズムもないであろうことは、多くの哲学者が指摘しているところであります。浅薄な全人間的教養からヒューマニズムを説かれる方々の中には、あたかも個体の保存と種族の保存とが対立しているかの如くお考えの方もありますが、これらは決して対立したものでなく、私達のもつ遺伝子（ＤＮＡ）のレベルで完全に１つのものとして統合されたものでありますから、健全なＤＮＡをあくまでも維持していくということこそが、医は仁術の基盤となるものではないでしょうか。大学人でありながら、一向に研究に御理解をお示しにならない方々もいらっしゃいますし、また現に教育と研究とが分業されたような大学さえもができつつありますが、真のヒューマニズムは、極度に専門化された研究からこそ生まれるものではないでしょうか。私達人類は今後生き続ける限り、個体としても種族としても限界状況を生きていくことを余儀なくされるでありましょう。このような時にお涙頂戴的な浅薄なヒューマニズムや、他のものへの逃避は許されないでありましょう。私は教育者という言葉は欺瞞だと思っている人間ではありますが、真面目で謙虚な一学徒として限界状況から眼をそらさずに、個体としても人類としても生きていきたいと考え、またその考えを次代の人達に話していきたいと思っています。何故ならそうすることが現在私達が直面しかかっている限界状況の中で、種族の保存をはかる道であるような気がしているからです。

（生化学講座教授）